(C)下野新聞社　無断複製転載禁止。

脳・心臓・血管 ワースト脱却処方箋 from獨協医大

10

脚の血流障害

脳や心臓疾患の可能性

緒方孝治准教授

じっとしていると何ともないけれど、長い距離を歩いたり、階段を上るとふくらはぎがだるくなったり痛くなって歩けなくなったり、しばらく休むと症状が消え、また歩けるようになる―。このような症状を間欠性跛行と呼んでいます。

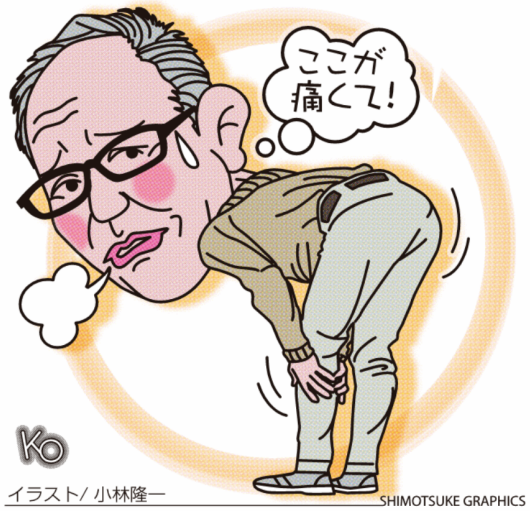
間欠性跛行は、腰部の神経圧迫で生じることも少なくありませんが、動脈硬化により下肢（脚）の動脈内腔が狭くなったり、詰まったりして血流障害を起こして生じる場合があります。ほぼ毎回決まった距離の歩行で症状が出るのが動脈硬化による間欠性跛行の特徴です。

治療は、まず動脈硬化の原因となる生活習慣病（喫煙、高血圧、高脂血症、糖尿病）の治療を行った上で、運動療法や薬物療法（血液をさらさらにする薬）を行うことが一般的です。

運動療法や薬物療法で効果が十分上がらない場合には、カテーテル治療（血管拡張、ステント留置など）やバイパス手術（狭窄・閉塞部を迂回する経路をつくる手術）を行うことがあります。

血流障害が進行すると、歩行できる距離が短くなったり、足の指に痛みや色調変化が生じたり、潰瘍が生じたりしますが、適切な治療を行えば、多くの場合、症状の進行は抑えられるといわれています。

一方、忘れてならないのは、動脈硬化は全身の血管で進行するということです。下肢の血管の動脈硬化が進んでいる患者さんは、下肢だけでなく全身の血管に動脈硬化が生じている可能性があります。脳に血液を送る頸動脈や心臓の筋肉に血液を送る冠状動脈にも動脈硬化が進んでいる場合、脳梗塞や狭心症、心筋梗塞（虚血性心疾患）などの脳・心臓疾患を発症しやすいと考えられます。



イラスト/小林隆一　SHIMOTSUKE GRAPHICS

間欠性跛行の症状がある方は、下肢だけではなく、心臓や脳の心配もする必要があるのです。

下肢の血流障害は、動脈の拍動を確認したり、血圧を測定したりすることで、比較的容易に診断することができます。下肢の血流障害を指摘された場合、頸動脈狭窄や冠状動脈狭窄の有無について主治医と相談してください。適切な処置を受け、脳梗塞や狭心症、心筋梗塞の発症予防をすることがお勧めです。

適度な運動と生活習慣の改善で、動脈硬化の進行を抑え、健やかな生活が続けられるようにしていきましょう。

（獨協医大心臓・血管外科学准教授　緒方孝治）

（毎週金曜日掲載）